

令和7年度 卒業生等アンケート結果の分析

人文学部・人文社会科学研究科

教育学部・教育学研究科

医学部医学科

医学部保健学科・保健学研究科

理工学部・理工学研究科

農学生命科学部・農学生命科学研究科

地域共創科学研究科

地域社会研究科

教養教育開発実践センター

【人文社会科学部】

回収率が低く標本数が少ない（47 名）が、今回の回答の分析結果は以下のとおりである。

進路について

問 3 就職・進学先は、入学時に希望していた進路と一致しますか。

「希望どおり」「大体希望どおり」が 55%であり、過半数の回答者が希望どおりに進路選択できていることがわかる。これに、「希望どおりではないが満足している」の 28%を加えると 8 割以上が進路選択について満足している。

II 本学在学中の教育や学生支援について

問 4 教育内容に、全体として満足でしたか。

「満足」「どちらかといえば満足」が 89%であり、R6 調査より 8%増加なっている。他方、「不満」「どちらかといえば不満」は 0%である。全体としては高い満足度が得られていると考えられる。

問 5 学習や研究に関わる施設、設備、備品は十分でしたか。

「十分」「不足していたが学習や研究はできた」が 94%であり、R6 調査（93%）とほぼ同水準である。なお、「不十分で学習や研究がやりにくかった・できなかった」という否定的な回答は 0%である。今後も継続的な改善が望まれる。

問 6 課外活動に関わる施設、設備、備品は十分でしたか。

「十分」「不足していたが課外活動はできた」が 81%であり、R6 調査（79%）とほぼ同水準である。また、「不十分で課外活動がやりにくかった」というやや否定的な回答は 2%であり、R6 調査(7%)に比べて 5%改善している。

問 7 就職活動への支援は十分でしたか。

「十分」「不足していたが就職活動に問題はなかった」が 77%であり、R6 結果（81%）から 4%低下している。他方、「不十分で就職活動に苦労した」は 6%であり、R6（4%）から 2%増加している。就職活動が十分行われていることへの肯定的回答が多かったものの、就職活動に対応できていない者が少なからず存在している可能性があり、引き続き改善が望まれると考えられる。

III 学生生活で感じたこと、身に付いたと思うことについて

問 8 学位授与方針の中での①～④それぞれについて身に付いたと思われませんか。

学際的な教養と高度な専門性（①）については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が 81%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」は 2%である。自然や社会を見通す力（②）については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が 85%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」は 2%である。国際社会や地域社会の問題を解決していく力（③）については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が 68%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」は 4%である。学び続ける力（④）については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が 83%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」は 0%である。

全体的に肯定的な回答が多いものの、否定的な意見も若干みられることから継続的な取り組みが必要であると考えられる。

問 9 教養教育科目で掲げられる到達目標は身についたか。

主体的・能動的学修態度（①）については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が 85%で

あり、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」は0%である。多元的な視点や思考法(②)については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が85%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」は0%である。英語能力(③)については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が36%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」は38%である。地域志向性(④)については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が85%であり、「身に付かなかった」は0%である。国際性(⑤)については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が43%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」は28%である。

主体的・能動的学修態度(①)・多元的な視点や思考法(②)・地域志向性(④)については肯定的な回答が多い。一方、英語能力(③)・国際性(⑤)については肯定的な意見はそれぞれ半数以下であり、かつ、否定的な意見が多いため改善が必要であると考えられる。

問10 仕事に関わることで、大学で学んだこと・経験が役に立っているか。

「非常に役に立っている」「役に立っている」と回答した者は、「学際的な教養・高度な専門性”(①)で60%、「学術的な観点から自然や社会を見通す力”(②)で72%、「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力”(③)で19%、「学び続ける力”(④)で77%である。他方、「あまり役に立っていない」「役に立っていない」と否定的な回答は①で21%、②で11%、③で55%、④で4%である。

以上から、「学際的な教養・高度な専門性”(①)、「学術的な観点から自然や社会を見通す力”(②)、「学び続ける力”(④)については肯定的な意見に比べて否定的な回答は多くはなつたと考えられる。なお、「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力”(③)については相対的には満足している回答は19%にすぎず、否定的な意見が過半数(55%)を超えることから、今後更なる改善が求められている。

問11 仕事以外の生活の中で、大学で学んだこと・経験が役に立っているか。

「非常に役に立っている」「役に立っている」と回答した者は、「学際的な教養・高度な専門性”(①)で66%、「学術的な観点から自然や社会を見通す力”(②)で70%、「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力”(③)で64%、「学び続ける力”(④)で77%である。他方、「あまり役に立っていない」「役に立っていない」と否定的な回答は①で15%、②で9%、③で13%、④で0%である。

①～④のすべてで相対的には満足している回答が多いが、①や③では否定的な意見が10%を超えており、今後更なる改善が求められている。

IV 在学生のため、今後の教育や学生支援に必要と思われること

問12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいか(複数回答可)。

教育の充実に関して、さまざまな項目での充実が望ましいと回答されている。特に、半数以上が挙げているのは、コミュニケーション力(66%)である。今後の学部教育改善の参考にしたい。

問13 問12以外のどの分野の支援を充実させることが望ましいか(複数回答可)。

教育以外の支援に関して半数以上が挙げている項目はないが、研究室・ゼミナール活動(46%)、キャリア教育(45%)では充実を望む声が相対的に多い。引き続き支援の内容等の改善を図りたい。

問14 再び本学で学ぶとしたら、どのような機会にしたいか。

選択肢としては、「資格修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」(43%)と「必ずしも仕

事・職業とは関係ないことを広く教養として学ぶ機会」(43%)が相対的に多かった。今後の教育改善の参考にしたい。

【人文社会科学研究科】

回答が0件のため、分析・検証不能。

【教育学部】

回答者が少ないため（27 名）、今回の結果を以って教育学部卒業生の総意にはならないことに留意しなければならない。その一方で、積極的に調査にご協力いただいた卒業生の意見として、以下、各設問の結果について述べることにする。

問 4

教育内容について、「満足」「どちらかと言えば満足」の回答率が 82%であったことから、おおむね満足していたと考えられる。

問 5

学習や研究に関わる施設・設備・備品について、「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」の合計は 89%であり、前回調査（令和 6 年度）の 90%と遜色ないものと考えられる。「不十分で学習や研究がやりにくかった」の回答が 1 件あるが、施設・設備・備品については更新が必要なものもあり、随時現状確認を行い、また学生教職員連絡協議会等の場で意見交換を図りながらさらなる改善に努める。

問 7

就職活動への支援について「十分だった」「不足していたが就職活動に問題はなかった」の合計は 67%で、前回調査（令和 6 年度、77%）の値に及ばなかった。教職支援室の運用や各教育委員会説明会のあり方について、今後検討する必要があるのかもしれない。一方「不十分で就職活動に苦労した」「不十分で就職活動ができなかった」の合計は 7%となっており、その具体的な内容について精査したうえではあるが、場合によっては弘前大学教育推進機構キャリアセンターとの連携を図っていく必要があるのかもしれない。

問 8

③を除く全ての項目において「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」の合計は 70%を超えていた。対して「身に付かなかった」「どちらかといえば身に付かなかった」の合計は 1 割前後であり、概ね身に付いたと考えていることが窺われる。

一方、③「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」に対する回答は 67%であった。この回答率が他の項目よりも低くなった要因として、教育学部では地域協働型教員を養成するためのカリキュラムを構築しているため、「国際社会」というキーワードが、アンケートの設問意図や回答者の関心と必ずしも一致しなかった可能性が考えられる。

問 10

① 学際的な教養と高度な専門性、②学術的観点から自然や社会を見通す力、③学術的な知識を具体的

な実践へ移し国際社会や地域社会の問題を解決していく力、④常に新しい問題に挑戦し続け生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力、の各項目について、「非常に役立っている」「役に立っている」の合計を見ると、それぞれ①67%（昨年度 90%）、②59%（同 77%）、③22%（同 67%）、④81%（同 80%）となった。③については他の項目と比べて低い数値となっており、問 8 と同様、「国際社会」というキーワードが、アンケートの設問意図や回答者の関心と必ずしも一致しなかった可能性が考えられる。

問 11

①学際的な教養と高度な専門性、②学術的観点から自然や社会を見通す力、③学術的な知識を具体的な実践へ移し国際社会や地域社会の問題を解決していく力、④常に新しい問題に挑戦し続け生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力、の各項目について、「非常に役立っている」「役に立っている」の合計を見ると、それぞれ①59%（昨年度 90%）、②56%（同 59%）、③48%（22%）、④78%（同 81%）となり、総計比率と比較して同等若しくは低い値を示した。教育学部のカリキュラムは、教員養成を目指すものであるため、生涯学習能力を含めた日常生活に対する有用性とは馴染まない側面があるかもしれない。

問 12

一部の項目で 10 点に満たない項目があったが（選択肢 2,6,10）、多くの選択肢で 10 点以上の高い数値を示した。それらは回答者が社会人または教員として必要なスキルだと感じているのであろう。なかでも「5.コミュニケーション力(15 点)」は、回答者が教育現場や社会に出てそのスキル向上を痛感しているのではなかろうか。今回の結果は、学部先輩方からの重要な示唆として、今後の教育活動に活かしていきたい。

問 13

複数回答のなかで、最も得点の高かった選択肢は、「4.研究室・ゼミナールの活動(12 点)」であった。この結果は、ゼミや演習などといった少人数教育に教育効果を認め、期待を寄せていることが窺える。さらに各教員が専門分野を活かした魅力的な教育コンテンツを学生に提供していたことを示唆している。一方、「3.クラス担任制度」を除き、他の選択肢も満遍なく回答が見られたことから、多様なニーズがあることを認識したうえで今後の学生支援の充実を図ることとする。

問 14

「1.資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」の占める割合が 52%、「3.必ずしも仕事・職業とは関係のないことを広く教養として学ぶ機会」が 41%となった。前者は今後既卒者に対するキャリア向上のための研修の充実といった取り組みの必要性を示していると捉えられる。後者は、

大学が単なる職業訓練にとどまらない教養知を提供することの意義を示唆していると考えられる。

【教育学研究科】

今回のアンケート調査の対象である令和3年度修了生の回答者数は、教職実践専攻4名、学校教育専攻1名であった。

問3

「希望どおり」100%であるので、入学時に希望していた進路に進めていることが伺える。

問4

「満足だった」100%であり、教育内容について肯定的に捉えられていたと考えられる。

問5

「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」で100%であり、十分設備、備品については肯定的に捉えてよいと考えられる。

問6

「十分だった」「不足していたが課外活動はできた」が100%であり、十分設備、備品については肯定的に捉えてよいと考えられる。

問7

「十分だった」が5名中4名であり(80%)であり、就職支援については達成していたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問8①

「身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問8②

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問8③

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問8④

「身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問9①

「身に付いた」が5名中4名であり(80%)であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問9②

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が5名中4名であり（80%）であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問9③

「身に付いた」が5名中1名であり（20%）であり、「一概に言えない」が3名であったため達成させることができていないと考えられる。一方で教育学研究科教職実践専攻の特性上、国内の教育課題の解決が重点化されるため、英語教育は重視されていない実情にあることは否めない。

問9④

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が5名中4名であり（80%）であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問9⑤

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が5名中3名であり（60%）であり、「一概に言えない」が2名であったためあまり達成させることができていないと考えられる。一方で教育学研究科教職実践専攻の特性上、国内の教育課題の解決が重点化されるため、国際性については重視されていない実情にあることは否めない。

問10①

「非常に役に立っている」「役に立っている」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問10②

「非常に役に立っている」「役に立っている」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問10③

「非常に役に立っている」「役に立っている」と回答した者はいなかったため達成させることができていないと考えられる。一方で教育学研究科教職実践専攻の特性上、国内の教育課題の解決が重点化されるため、国際的な視点については重視されていない実情にあることは否めない。

問10④

「非常に役に立っている」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問11①

「非常に役に立っている」「役に立っている」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問11②

「非常に役に立っている」「役に立っている」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問11③

「非常に役に立っている」「役に立っている」が5名中3名であり（60%）、概ね達成させることができたと考えられる。なお1名が「一概に言えない」、1名が「あまり役に立っていない」と回答しているが、専攻が明らかなではないので、その原因については明らかにできない。一方で教育学研究科教職実践専攻の特性上、国内の教育課題の解決が重点化されるため、国際的な視点については重視されていない実情にあることは否めない。

問 11④

「非常に役に立っている」「役に立っている」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問 12

教職実践専攻において、これまでも教職についての協働的な活動を支える論理的思考力及びコミュニケーション力の育成のために教員が一丸となって努力してきたが、今後も一層の努力をしていく。

問 13

「研究室・ゼミナールの活動」について、教職実践専攻では、ゼミ・研究室的なハラスメントの温床となる「蛸壺化」をさけ、「全教員が全院生をみる」ということで研究活動を進めている。こうした考えを院生に周知すると共に、研究に関わる個別の相談にはこれまで以上に細やかに対応するようにしていく。

問 14

「1」「2」については、教職実践専攻は教員免許について専修免許状の資格を習得でき、また教職についての専門性を学ぶ機関であり、さらにこれまでの回答の様子を踏まえると、ここでの回答は教職実践専攻への期待というよりは本学の全学部での学びを考えていると思われる。

【医学部医学科】

今回の調査対象者からの回答数は13件であった。回答数は限定的であり、個々の回答の影響を受けやすい点に留意する必要があるが、回答から一定の傾向が確認できるため、以下に分析結果をまとめた。

1. 大学で学んだ内容の有用性（問10・問11）

仕事に関わる内容・日常生活の双方で、「学際的な教養と高度な専門性」が役に立っていると回答した者が多数を占めた。

- ・仕事で役立つ：11名（84.6%）
- ・日常生活で役立つ：9名（69.2%）

昨年度同様、専門教育の成果は卒後も十分に活かされていると評価できる。

2. 施設・設備に関する評価（問5・問6）

学習や研究に関わる施設・設備については、肯定的評価が7名（53.8%）であり、昨年度より改善はみられるものの、満足度が高いとは言えない。課外活動施設については肯定的評価が9名（69.2%）であったが、改善の余地は残ると考えられる。

3. 大学で身についた能力（問8・問9）

基礎力・専門的能力（学際的教養、自然・社会を見通す力など）は概ね身につけていると評価されている。一方で、英語運用能力や国際性の項目では否定的回答が多く、国際性教育の強化が課題として浮き彫りとなった。

4. 仕事での活用状況（問10）

医学科の特性上、専門知識の有用性は非常に高く評価されている（84.6%）。

しかし、「③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」については否定的回答が46%と多く、臨床現場で求められる能力の育成について改善の余地が示唆される。

5. 今後育成が望まれる能力（問12）

医学科では「専門的知識・技能」「基礎的知識・技能」「コミュニケーション力」「課題探求能力」など、医療職として不可欠な能力を求める声が多かった。

6. その他必要な支援分野（問13）

海外留学支援へのニーズが高く、キャリア教育や研究室活動の充実が求められる。

引き続き、それぞれの事項について改善を図りながら、充実した教育・支援体制の構築を検討・実施することが必要である。

【医学研究科】

今回の調査対象者からの回答数は3件であり、回答者数が極めて少ないため、回答内容が全体の傾向を必ずしも反映するものではない点には留意が必要である。しかし、回答傾向から一定の特徴を把握することができるため、以下に分析結果をまとめる。

1. 大学で学んだ内容の有用性（問10・問11）

仕事に関わる場面においては「学際的な教養と高度な専門性」「学術的観点から自然や社会を見通す力」が役立っていると回答した者が多かった。一方で、「③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」については中立的意見が見られ、専門性の活用について個人差があることが示唆された。

2. 施設・設備に関する評価（問5・問6）

学習・研究施設に対する評価は「十分」「不足していたが支障なし」「一概に言えない」が分散し、満足度は一定ではない様子がうかがえた。課外活動施設についても同様に評価が分かれ、

改善の余地が見られる。

3. 大学で身についた能力（問 8・問 9）

「学際的教養・専門性」「自然・社会を見通す力」「学び続ける力」など、大学院生として必要な基礎能力は概ね身についたと評価されている。一方で、「国際性」「英語能力」については中立・否定的評価が多く、今後の改善が必要な領域であることが明確となった。

4. 仕事での活用状況（問 10）

専門知識や学術的視点は卒後に活用されているものの、実務・現場で必要とされる問題解決力については否定的評価がみられ、より実践的な教育内容の強化が望まれる結果となった。

5. 今後育成が望まれる能力（問 12）

「専門的知識・技能」「論理的思考力」「情報収集力」などが挙げられており、大学院修了後のキャリアに直結する能力の育成が求められていることが読み取れる。

6. その他必要な支援分野（問 13）

研究室活動の充実、地域貢献活動、海外留学支援などが挙げられ、特に研究活動を支える体制の拡充を求める声が見られた。

7. 自由記述からみえる課題（問 15）

自由記述では、大学院教育の現場で頻繁に指摘される内容と共通する声が見られた。たとえば、デジタル化の遅れ、研究指導の質、大学院生への経済的支援の不足など、構造的な課題が挙げられた。

引き続き、それぞれの事項について改善を図りながら、充実した教育・支援体制の構築を検討・実施することが必要である。

【医学部保健学科・保健学研究科】

医学部保健学科 34 名、保健学研究科 4 名、計 38 名の分析を行った。

・問 2、問 3 現在の職業と進路の一致

もともと医療技術者の養成校という役割もあり、82%が「医療・介護・福祉」もしくは自治体の医療関連部門に就いていて、82%が入学時に希望していた進路と一致、もしくは大体希望通りとなっていた（うち希望どおりは半数だった）。

・問 4 教育内容に関する満足度

「不満足だった」1 名、「どちらかと言えば不満足」2 名、「一概に言えない」6 名であり、他の 32 名、約 84%は「満足」もしくは、「どちらかという満足」という回答だった。

・問 5 学習や教育に関わる施設・設備・備品の満足度

「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」と回答した学生は約 80%であり、「一概に言えない」「不十分でやりにくかった」が 8 名だった。他学部の平均とほぼ同じ満足度であった。

・問 6 課外活動の満足度

「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」と回答した学生は 74%であり、昨年と同様だった。

・問 7 就職活動への支援に関する満足度

「十分だった」「不足していたが就職活動に問題はなかった」学生は 76%であり、総計の 68%より少し満足度が高い様子であった。

・問 8 学生生活で感じたこと、身についたと思うことについて

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」を合わせると、①「学際的な教養と高度な専門性」は 84%と高く、総計を上回っていて、身についたと断言したものは昨年の 7 名から 13 名に向上していた。②「学術的観点から自然や社会を見通す力」は、63%で他学部 77%に比べ低かった。③「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」はさらに 55%とやや低く、昨年同様だった。④「常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」は、76%でこちらも昨年同様だった。

全般的に昨年の調査より、①は上回った評価を得ている。保健学科・保健学研究科が実施している医療・保健・福祉に関する専門性の高い教育は、比較的高い評価が今年度も得られたといえるが、逆をいえば、自然や社会を見通す力はつきづらいのかもしれない。なお、十分身についたと実感しているのは若干増えたものの少ない傾向だった。これら結果は今後も継続課題となると考える。また、国際社会や地域社会の問題を解決していく力は、変動が少なく低いままで、対応としては不十分と思われる。

・問 9 教養科目について

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」を合わせて、①「主体的・能動的学習態度」66%と昨年の値より 10%ほど下がった、②「多元的な視点や思考法」71%とこれも昨年より 10%低下を示した。③「国際共通語としての英語能力」37%、⑤「国際性」は、32%と昨年同様低い数値で、まだまだ国際性に伴い英語教育の充実が継続的に必要である。なお、④「地域志向性」は、59%と昨年の 66%だったのに比べ、若干下がった。地域の持つ強みや特色ある魅力の再発見につながる教育が今後とも必要と思われる。

・問 10 仕事に関わることで、弘前大学で学んだことや大学での経験の役立ち状況

「非常に役立っている」「役立っている」をみると、①「学際的な教養と高度な専門性」73%と昨年より 10%程低かった、②「学術的観点から自然や社会を見通す力」59%と同様に 10%減、③「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」は 26%と昨年の半数近くに減少した、④「常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」79%であり、こちらは高水準だった。このなかでも③「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」は 26%と昨年の半数近くの値で減少した、他学部の比率でも同様の数値であり、国際社会や地域社会への貢献度について検討する必要性を感じた。

・問 11 仕事以外の日常生活の中で、弘前大学で学んだことや大学での経験の役立ち状況

「非常に役立っている」「役立っている」をみると、①「学際的な教養と高度な専門性」59%と昨年を大きく下回った、②「学術的観点から自然や社会を見通す力」55%（昨年 70%）、③「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」55%（昨年 66%）、④「常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」66%、（昨年 77%）であり、いずれも昨年を 10%程度下回った割合であった。

役立っている割合が、昨年より低くなっていたことから、主軸である医療・保健・福祉に関する学びは、高度な専門性を感じられず、さらに役立っていると実感するまで至っていない。かつ、学術的な学びや、新規の課題に関する解決能力も、さほど成長する過程には入っていないと感じるものが、半数近くいるのが現状と思われる。

・問 12 在学生のため支援が必要と思われること

「コミュニケーション力」が 24 名と回答が多かった。医療職に勤めることが多いことから、患者や利用者、その家族との会話能力が必要と回答したものが多かったのではないかと。また、医療職はチーム医療であることが多く、スタッフ間コミュニケーションも大切なのではないだろうか。その他目立ったのは、専門知識と技能および論理的思考であり、医療現場では専門性が求められ、かつ学術的な活動では、論理的思考が求められている実感があると考えられる。また、医療にかかわらず問題解決力は重要で、学生時代からその支援を必要としていたことが推測される。

・問 13 支援を充実させることが望ましい項目

このなかで比較的多かったのは、「研究室・ゼミナールの活動」の 50%をはじめ、「キャリア教育」、「インターンシップ」が約半数で昨年同様あった。特筆すべく項目は見当たらなかった。

・問 14 今後本学で学ぶ時の機会

人数が多かったのは、「資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」63%であったこれ以外は、5 名以下にとどまっている。

・問 15 大学の教育や学生支援サービス向上のための意見

保健学科、保健学研究科では実際に働いている現役の非常勤講師に来てほしい、またはOBの意見が聞きたいなどの意見があった。

また、留学制度の充実化や金銭面の支援制度をもう少し増やしてほしいなどの意見があった。

【理工学部・理工学研究科】

問1 回答件数

学部卒が 57 件（R6 年度 65 件、R5 年度 45 件）、院卒が 16 件（R6 年度 24 件、R5 年度 18 件）であった。学部卒・院卒ともに昨年度と比較して回答件数が減少しており、回収率は、定員数（学部 360 名、大学院 120 名として計算）から大まかに見積もると、20%に至っていない。より回収率を向上させる工夫が望まれる。

問2 回答者の職業？

学部卒；1 位「情報通信業」21%、2 位「製造業」19%

院卒；1 位「製造業」56%、2 位「情報通信業」、「建設業」12.5%

学部卒では「製造業」と「情報通信業」が全体の 4 割を占めている。院卒では半数以上が「製造業」である。

問3 入学時の希望通りの進路に進んでいるかどうか？

（総回答数（学部卒 57、院卒 16）のうち、下記選択肢への回答数の割合を示す。左側の数値が学部卒、右側が院卒。数値の丸め込みの関係上、総和が 100%とならない場合があることについて、あらかじめご了承ください。以下、特に断りのない限り同様。）

「希望どおり」24.6%、12.5%

「大体希望どおり」28.1%、43.8%

「希望通りではないが満足している」31.6%、31.3%

「希望通りではなく満足していない」5.3%、0%

「希望する進路がなかった」10.5%、12.58%

「希望通り」、「だいたい希望通り」との回答が 50%以上を占めている。

問4 教育内容は全体的に満足であったか？

「満足だった」22.8%、37.5%

「どちらかといえば満足だった」63.2%、50%

「一概に言えない」10.5%、12.5%

「どちらかといえば不満足だった」1.8%、0%

「不満足だった」1.8%、0%

肯定的回答が学部卒・大学院卒ともに 85%を超えた。

問5 学習や研究に関わる施設などは十分であったか？

「十分だった」54.4%、50%

「不足していたが学習や研究はできた」29.8%、37.5%

「一概に言えない」10.5%、12.5%

「不十分で学習や研究がやりにくかった」3.5%、0%

「不十分で学習や研究ができなかった」1.8%、0%

肯定的意見が学部卒・大学院卒ともに優に 80%を超えた。

問 6 課外活動に関わる施設などは十分であったか？

- 「十分だった」 40.4%、50%
- 「不足していたが課外活動はできた」 29.8%、18.8%
- 「一概に言えない」 19.3%、31.3%
- 「不十分で課外活動がやりにくかった」 8.8%、0%
- 「不十分で課外活動ができなかった」 1.8%、0%

肯定的意見が学部卒・院卒ともに 70%前後となっている。

問 7 就職支援に関する支援は十分であったか？

- 「十分だった」 42.1%、43.8%
- 「不足していたが就職活動に問題はなかった」 26.3%、18.8%
- 「一概に言えない」 28.1%、37.5%
- 「不十分で就職活動に苦労した」 1.8%、0%
- 「就職活動ができなかった」 1.8%、0%

肯定的回答が学部卒では 70%程度、院卒では 60%程度となっている。

問 8 学位授与方針の中で掲げられている知識や資質がどれだけ身についたか？

(項目 ①～④に対する延べ総回答数(学部卒 228、院卒 64)のうち、下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)

- 「身についた」 24.2%、34.4%
- 「どちらかといえば身についた」 51.8%、45.3%
- 「一概に言えない」 12.3%、17.2%
- 「どちらかといえば身につかなかった」 11%、1.6%
- 「身につかなかった」 0.9%、1.6%

肯定的意見が学部卒は 65%程度、院卒は 80%程度となっている。進学することによって、より高い知識と資質が身につくことが明らかである。

問 9 教養教育科目で到達目標としている知識・学力は身についたか？

(項目 ①～⑤に対する延べ総回答数(学部卒 285、院卒 80)のうち、下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)

- 「身についた」 21.8%、15%
- 「どちらかといえば身についた」 41.4%、46.3%
- 「一概に言えない」 17.9%、27.5%
- 「どちらかといえば身につかなかった」 11.9%、3.8%
- 「身につかなかった」 7%、7.5%

肯定的意見が学部卒・院卒ともに 60%以上となっている。項目 ③の英語能力、ならびに項目 ⑤の国際力で否定的な回答が目立った。

問 10 大学で学んだことや経験が仕事で役に立っているか？

(項目①～④に対する延べ総回答数(学部卒 228、院卒 64)のうち、下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)

「非常に役に立っている」 18.4%、21.9%
「役に立っている」 42.5%、40.7%
「一概に言えない」 18%、15.7%
「あまり役に立っていない」 15.4%、17.2%
「役に立っていない」 5.7%、4.7%

肯定的回答が学部卒、院卒ともに 6 割程度となっている。

問 11 大学で学んだことや経験が仕事以外で役に立っているか？

(項目①～④に対する延べ総回答数(学部卒 228、院卒 64)のうち、下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)

「非常に役に立っている」 18.9%、18.8%
「役に立っている」 50.5%、51.6%
「一概に言えない」 15.8%、26.6%
「あまり役に立っていない」 8.4%、0%
「役に立っていない」 6.6%、3.2%

肯定的回答が学部卒、院卒ともに 70%近くまで到達している。国際社会や地域社会の問題を解決していく力がやや否定的であった。

問 12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいか(複数選択可)？

(延べ総回答数(学部 254、院 64)のうち、選択された割合が多い選択肢上位 3 つを抜粋)

学部卒；

1 位「コミュニケーション力」 15%、
2 位「論理的思考力」 9.8%、
3 位(同率)「情報収集力」、「課題探究能力」 9.4%

院卒；

1 位「コミュニケーション力」 15.6%、
2 位(同率)「専門的知識・技能」、「論理的思考力」、「自己管理力」、「課題探究能力」 10.9%

学部卒、院卒ともに「コミュニケーション力」が 1 位となっている。

問 13 問 12 以外のどの分野の支援を今後充実させればいいのか(複数選択可)？

(延べ総回答数(学部 141、院 33)のうち、選択された割合が多い選択肢上位 3 つを抜粋)

学部卒；

1 位「部活・サークル活動(スポーツ中心)」 17%、
2 位「キャリア教育」 13.5%、
3 位「部活・サークル活動(文化・研究中心)」 11.3%

院卒；

1 位「研究室・ゼミナール活動」39.4%、

2 位「インターンシップ」18.2%、

3 位「部活・サークル活動（スポーツ中心）」、「基礎的知識・技能」、「アルバイト」9.1%

学部卒では部活動に関する要望、院卒では研究室活動に関する要望が上位に来ている。就職活動に関する要望は両者共通に見られる。

問 14 再び本学で学ぶとしたら、どのような機会にしたいか？

（総回答数（学部卒 57,院卒 16）のうち選択された割合が多い選択肢上位 3 つを抜粋）

学部卒；

1 位「資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」 45.6%、

2 位「必ずしも仕事・職業とは関係のないことを広く教養として学ぶ機会」 31.6%、

3 位「技術的知識ではない広い知識を、職業人としての実力を磨くために学ぶ機会」 15.8%

院卒；

1 位「資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」 37.5%、

2 位「必ずしも仕事・職業とは関係のないことを広く教養として学ぶ機会」 31.3%、

3 位「技術的知識ではない広い知識を、職業人としての実力を磨くために学ぶ機会」 25%

学部卒・院卒ともに同選択肢が 1 位から 3 位までを占めている。

【農学生命科学部・農学生命科学研究科】

令和7年度「卒業生等・企業等アンケート調査」は、令和3年度の卒業生等（卒業・修了3年後）に対して行われたものである。このうち、農学生命科学部（以下、農生）および農学生命科学研究科（以下、農研）でみられた特徴的な回答について概要を説明する。

問3 就職・進学先は、入学時に希望していた進路と一致しますか。

「希望どおり」と「大体希望どおり」と回答した肯定的回答は、農生で45.5%、農研で28.6%となり、全学の59.8%と比べるとやや低めであった。令和6年度（農生59.5%、農研46.2%、全学68.5%）および令和5年度（農生52.4%、農研42.9%、全学61.0%）でも同様の傾向がみられることから、引き続きその要因を丁寧に把握していくことが重要である。一方で、否定的回答については、農生では全学（11.5%）よりも低い9.1%となっており、入学後の学びを通じて、自身により合った進路を前向きに見いだしている学生が一定数存在することも示唆される（農研では28.6%）。

問4 教育内容に、全体として満足でしたか。

「満足だった」と「どちらかといえば満足だった」を合わせた肯定的回答は、農生で86.4%、農研で100%と、全学の83.9%に比べて満足度が高い値であった。昨年度も同様の結果が得られており（農生83.3%、農研84.6%、全学80.8%）、継続して教育内容への評価が高いものと思われる。

問7 就職活動への支援は十分でしたか。

「十分だった」と「不足していたが就職活動に問題はなかった」を合わせた肯定的回答は、全学（67.8%）に比べ、農生で61.4%、農研で57.1%とやや低い値であった。昨年度は「不十分で就職活動に苦労した」と「不十分で就職活動ができなかった」の否定的回答が、農生では11.9%と、全学の5.4%を大きく上回ったが、今年度はそのような傾向がみられなかった（農生2.3%、全学3.8%）。

問8 弘前大学では、次の①から④に掲げる知識や資質を身に付けた学生に対して、学位を授与する旨の方針を明確にしました。それらは身に付いたと思われますか。

「①学際的な教養と高度な専門性」、「②学術的観点から自然や社会を見通す力」、「③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」、「④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」のいずれの項目においても、全学に比べ農生および農研で肯定的回答が低い値であった。このような傾向は過去2年にみられなかったことから、今後は留意したい。なかでも、③の肯定的回答については3年連続で、全学に比べ農生および農研で低いことから今後のデータの推移に注視する必要がある（農生52.4%→54.8%→54.5%、農研42.9%→30.8%→28.6%、全学58.3%→58.1%→58.6%）。

問10 特に仕事に関わることで、大学で学んだことや、経験が役に立っていると感じますか。

「①学際的な教養と高度な専門性」について、肯定的回答は全学（64.4%）に比べ、農生（47.7%）および農研（42.9%）と明らかに低く、また否定的回答も全学（15.7%）に比べ農生（27.3%）で高い結果となった（農研では14.3%）。この傾向は昨年度もみられたが、その差が顕著になりつつあることから、今後の経過を注視していく必要があると思われる（昨年度の肯定的回答は、農生61.9%、農研61.5%、全学68.5%）。

「②学術的観点から自然や社会を見通す力」と「④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」については、全学に比べ、農生で低かったものの、農研では高くなった（②は農生52.3%、農研71.4%、全学65.5%、④は農生75.0%、農研100%、全学80.5%）。同様の傾向は「問11 仕事以外の日常生活の中で、大学で学んだことや、経験が役に立っていると感じますか」でもみられた。これらの力については、大学院の教育課程において効果的に涵養できていることが伺

える。

問 12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいですか。

例年、農生、農研、全学ともに「5. コミュニケーション力」、「11. 問題解決力」、「4. 論理的思考力」を選択する傾向がみられていた。今年度はこれら以外に、農生では「6. 自己管理力」が、農研では「3. 情報収集力」および「1. 専門的知識・技能」が上位を占めた。

問 15 上記以外で、大学における教育や学生支援サービス向上のために、ご意見がありましたらお聞かせください。

- 身体や精神の問題で通学が難しい学生を、オンラインでサポートしてほしい。例えば、分身ロボット（OriHime）の貸し出し、オンラインによるゼミ出席、相談やカウンセリングをオンライン可にするなど（農生）。
- 留年、休学している学生向けのサポートを手厚くしてほしい（農生）。
- 研究室での活動が心残りである。放任するのではなく、最低限の助言は心がけてほしい（農生）。
- 社会に出てから、コミュニケーションが難しい人、気配りができない人がとても目立つ。技術や知識の有無も大事だが、電話やメールでの言葉遣い、目上の人と接するときの態度などを学べる機会があると良いのでは（農生）。
- 国際性を高め、留学生の受け入れ人数を増やすためにも、本学が『高度人材ビザ』のポイント加算対象校となることを願っている（農研）、などのコメントがあった。

これら本学部・研究科にみられる特徴について学部内で情報共有し、教育改善の参考としたい。

【地域共創科学研究科】

本研究科の回答数が3名であるため一概には言えないが、以下のとおり分析した。

- ・ 就職先・進学先（問3）については「大体希望どおり」であったが、就職活動への支援（問7）については「一概に言えない」という回答も見られたことから、就職活動に関する支援が一部の学生にとって十分に認識されていない、または効果的に活用されていない可能性があると思われる。本研究科では、教員の所属部局との連携のもとで就職支援を行っていることから、今後は、所属部局との連携のさらなる強化、学生がより利用しやすい環境の整備等、研究科内における就職支援を強化するとともに、引き続きキャリアセンターの活用も促したい。
- ・ 在学中における教育内容（問4）については「どちらかといえば満足だった」、学習や研究に関わる施設、設備、備品（問5）については「十分だった」「不足はしていたが学習や研究科できた」という回答であったことから、本研究科の教育課程や研究環境は、概ね評価されていると考える。
- ・ 本学が定めるディプロマ・ポリシー（問8）については、回答にばらつきが見られるものの、①～④の全ての項目において、「身に付かなかった」という回答はなかったことから、概ね十分な教育研究指導を行うことができたと考える。
- ・ 仕事において大学で学んだことや経験が役立っていると感じるかという設問（問10）については「役立っている」という回答が大半であり、研究科での学びが修了後に活用できていると思われる。一方で、「学術的な知識を具体的な実践へ映し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」に関しては「あまり役に立っていない」という回答があったことから、今後の修了生の動向を注視し、必要に応じて教育内容の改善に活かしたい。
- ・ 今後望まれる学生支援（問13）として、「インターンシップ」「キャリア教育」等があげられたことから、学生のキャリア形成支援の取組の一つとして、授業科目として配置しているインターンシップの履修を促すなど、工夫を検討したい。

【地域社会研究科】

本研究科の回答数が1名であるため一個人の回答に対する分析にしかならざるを得ないが、以下のとおり分析した。

- ・ 在学中における教育内容（問4）については「満足だった」、学習や研究に関わる施設、設備、備品（問5）については「十分だった」という回答であったことから、本研究科の教育課程や研究環境は、概ね評価されていると考える。
- ・ 本学が定めるディプロマ・ポリシー（問8）については、①～④の全ての項目において「身に付いた」という回答であったことから、概ね十分な教育研究指導を行うことができたと考える。
- ・ 仕事や日常生活において、大学で学んだことや経験が役立っていると感じるかという設問（問10及び問11）については「非常に役立っている」という回答が大半であることから、研究科での学びが修了後に活用できていると思われる。一方で、「学術的な知識を具体的な実践へ映し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」については、「役に立っていない」との回答があったが、現在の仕事との関係での回答であり、仕事以外では「非常に役立っている」との回答となっていることから、研究科での学びが修了後に活用されていると考える。
- ・ 今後望まれる教育内容（問12）として、「情報収集力」「コミュニケーション力」等があげられたことから、必要に応じて教育内容の改善にあたって参考にしたい。

【教養教育開発実践センター】

問 9

今年度の卒業生アンケートの回答率は約 19%であり、前年度と同程度の数値であった。回答率は依然として 2 割程度に留まっているため、得られた傾向をそのまま母集団全体に一般化することには慎重である必要がある。そのうえで、回答結果の傾向を分析すると、複数の教育目標に関して肯定的な回答が比較的高い割合を占めた。具体的には、①「主体的・能動的な学習態度」は 78%、②「多元的な視点や思考法」は 77%、④「地域志向性」は 73%が「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答しており、前年度と同様に良好な水準である。これらの項目については、大学が掲げる教育目標が概ね達成されていると評価できる。一方で、③「国際共通語としての英語能力」は 30%、⑤「国際性」は 38%に留まり、それぞれ約 3 割が「一概に言えない」と回答している点は、前年度と同様の傾向であった。なお、今回の調査対象は令和 3 年度卒業生であり、令和 4 年度に実施された英語カリキュラム改訂の影響を受けていない世代である。今後は、改訂後の科目を履修した世代が卒業・社会経験を積んだ段階で、改訂の効果を中長期的に検証していく必要がある。